

電動車椅子サッカー！

こんにちは、金賀勇一です。

今回は、自分が生きがいにしてやっている電動車椅子サッカーの紹介と現状を説明したいと思います。電動車椅子サッカーとは、バスケット用のコートと直径33cmのサッカーボールを使用し、1チーム4名で試合をするスポーツです。電動車椅子の前方にフットガードを取り付けてボールを蹴り合います。2007年10月には日本で初のワールドカップが開催されるなど、国際的にも広がりを見せているスポーツです。

全国には、協会に登録しているチームだけでも34チームあります。もちろん千葉県にも2チームあり、自分が所属しているウイニングフェニックスは、2000年の9月に千葉県で2つ目の電動車椅子サッカーチームとして誕生しました。ボランティア（スタッフ）の方に協力していただきながら、千葉県立船橋特別支援学校の体育館を中心に活動をしています。定期的に大会があり、主に関東圏では全国予選大会や関東大会が行われています。

ウイニングフェニックスは、これら大会に出場しており年々順位を上げていっています。特に関東大会の成績は、3年前では6位だったのが昨年では4位でした。そして、先日出場してきたのが全国大会の出場権を獲得するための関東ブロック予選大会です。

そこでの成績と自分の感想や今後の抱負を話したいと思います。自分としては万全な状態で挑んだ大会で、全国出場権を決めるためには3位までに残らなければいけないのですが、その自信も当然ながらありました。試合形式は、リーグ制で2グループに分かれて三試合やった後、勝ち点等の合計でリーグ内での順位が決まります。最後にグループで決まった順位同士で一位、三位決定戦を行います。

自分のチームは、初戦0-6で敗退、2試合も0-1で敗退、3試合も0-3で敗退と散々な結果でしたが、戦ったのはほぼ関東の強豪チームだったので参考になることがたくさんあり、課題が見えた大会でした。

自分は、この電動車椅子サッカーを初めて9年目になりましたが、様々な試合を通してチームの成長に貢献できるよう頑張ってきたつもりです。今後もキャプテンとしてチーム全体を引っ張っていければ良いと思います。

自分の夢は、ワールドカップの日本代表に選ばれることですが、そのためには自分自身の技術の向上並びに、チーム自体も強くして全国大会には最低でも行かないと選ばれることは絶対にないのでこれからも頑張っていきたいと思っています。

来年は、全国大会に出場するぞー！

選手 & ボランティア募集!!

電動車椅子サッカーは重度の障害を持っていてもできる数少ないスポーツのひとつ。身体障害者手帳をお持ちの方、私たちのチームメイトになって一緒にサッカーを楽しみましょう！ボランティアさんも募集中しています。内容は、選手のサポート、練習の準備や掃除、紅白戦や試合での審判など。可能な範囲でお手伝いしていただけましたら嬉しいです。

少しでも興味をお持ちの方！見学も大歓迎ですので、まずは下記のアドレスにご連絡ください。質問もお待ちしています。



6月4日・試合の時の金賀さん&石井さん

ウイニングフェニックス公式HP(日程もこちら)

<http://homepage3.nifty.com/win-p/>

チーム代表・益子 真一 メール:yiv00025@nifty.com

キャプテン・金賀 勇一 メール:kane_yan@mbn.nifty.com

次号は石井さん
の話を伺います。

呑んべ〜シリーズ第4弾

呑んべの一言

十代の時から私は飲んでいきますね〜(ここだけの話しです)

お酒には楽しくなる作用があって飲むと笑顔になったり、体が疲れていても治って、リラックス効果がありますから、今も1ヶ月に一度、居酒屋に行って、みんなに声を掛けて飲んでいきます。私の飲み方は時間をかけながらみんなと飲んでいきます。

飲み会は、コミュニケーションの場でもあります。それは昔から変わりませんね〜

私の場合は、飲むとどうなると思いますか?知りたかったら、今度一緒に楽しいお酒をどうですか?私の知らないところが見れるかもしれませんよ。

顔馴染みになった居酒屋があります。毎月、行くことで入り口の何段かの階段を店長をはじめ店員さんが手伝ってくれます。もう常連ですね。(笑)私が座るテーブルも、決まっています。飲み物をオーダーするといつもストローも付いてきます。ここまでくるには何回も通って自分を知ってもらわないとここまでいかない、理解してもらえない、と思いますね。私が行く様になって他のメンバーも気軽に行ける様になりましたからねえ〜そう思うと、外に出たの飲み会も周りの人と交流の場になりますね!!

これからも飲み屋に行こうと思っています。私が行くことで、みんなと交流もできるし、ここで暮らしているんだよとみんなに知ってもらうためにもこれからもどんどん外に出て私のことを知ってもらえば嬉しいです。飲みに行くだけでなく、私の暮らしている地元の駅にポポラマーマやマックがあり、よく行って、テーブルも決まっています。行くことによって店員さんとも顔なじみになるんですね。居酒屋だけじゃなく…。だから、これからも外出していこうと思います。

話戻ります。

もしよければ、毎月の第3火曜日に居酒屋に行って飲んでいきますので、ぜひ会いに来て下さいね。待っています。

ではまた今度で〜す(^o^)

伊藤 聖

呑んべ〜のみなさん。

次に原稿を依頼するのはあなたかもしれない!!

b y 編集長

声の文法－27

要約 明治期以来、日本語の文法論は西欧語の文法論を規範として作られてきた。そこで主語＋述語(=S+P)という単位が必ずあり、この一組で文(Sentence)ができるという考え方を受け入れてしまった。現在でも学校文法は主語があるという前提で出来上がっている。本論ではこれが事実と反すると主張した三上章の文法論を支持し、紹介した。日本語では、「雨だ」「きれいね」という一語文が成立する。S+Tではなく、詞＋辞が最小単位なのである。

続いて、それは日本語はどのように文を作るのかを、源氏物語、枕草子、童謡の「森のクマさん」について見て来た。

日本語の構文法 －3

前回に続いて、ちあきなおみの歌った歌謡曲、「喝采」を取り上げて文の成り立ちを考える。

1、いつものように 幕があき
恋の歌 歌う 私に 届いた 報せは
黒いふちどりが ありました

私たち日本人は、日本語の歌謡曲を聴く時に文法など意識しないのだが、ここでは、日本語を勉強中の外国人のようにじっくりと見てゆく。

まず全体をみると、明らかに「主語」が無い事を確認できる。「幕があき」、「ふちどりがありました」は、主語＋述語のようであるが、全体の中に埋め込まれている。－マスあけて示した部分が、基本的には「詞＋辞」の単位でつながって一文ができている。切れ目には「あき」「歌う」のような動詞の中止形や、「恋の歌」のような体言止めもある。これが日本語の普通の並び方である。

「いつものように 幕があき」

文の冒頭に「いつものように」という副詞句があり、名詞「幕」と動詞「あく」の連用形「あき」がある。これだけでは幕があいた事はわかるが、どんな幕があいたのが、それが「いつもの事が」と判断したのはだれか、なぜかなど全くわからない。わからないままに、動詞「あき」が連用形のまま用言なしに止まっているので、聴き手の関心は幕があき、そしてどうなったのかと次に向かう。

「恋の歌 歌う私に」

ここで「私」と名告る主人公が出てくる。それで臆気ながら状況が見えてくる。「いつものように」という副詞句は、「幕があき」に直接つながっている。日本語は統語力がゆるいので、「いつものように」＋「恋の歌、歌う私」というつながりも許される。そうするとこの「私」はいつも幕のある大きなステージで、恋の歌つまり流行歌を歌うプロの歌手である…とだけし、思うであろう。

また、おもしろいのはこの歌詞の内容と、現在に今歌っているちあきなおみの姿とが、ひとつに重なることである。私たちがTV画面を見ていたとすると、実在の人気歌手、ちあきなおみが出てきて、「いつも流行歌を歌っている私」と歌い始めるのである。

日本文学の伝統には「私小説」と呼ばれているジャンルがあり、純文学と尊称されている。これは「私」が物語の語り手となり、実作者とフィクションの「私」との区別をあいまいにすることで強い現実感を保証する方法であるが、この歌でも歌の世界の主人公とちあきなおみが聴き手にとっては同じように見えてきて、歌の世界に強く引き込まれる仕組みとなっている。つまり「私」という言葉に、歌の主人公の「私」と実在の歌手ちあきなおみの「私」、さらに聴き手が自分の事のように感情移入して聴くという意味での「私」と多義的な意味が重なるのである。

「私に届いた報せは」

「私」という単語は構文上も多義的である。「恋の歌を今、歌っている私」と前文の説明を受けとめるだけでなく「その私に黒いふちどりのついた手紙が届いた」と後に続く文を従えている。

このような場合、西欧語ではS+Pの形を崩せないので関係代名詞を使ってふたつの文をつなぐ。日本語ではそんな面倒な事はしない。本論で統語論と構文論を区別する由縁である。

「報せは 黒いふちどりが ありました」

学校教育では今だに日本語に主語があるという前提で教えている。その際、主語の目印として「～は」と「～が」のどちらかの助詞の付いたものと教えている。この考えでゆくと上記の文には「報せが」と「ふちどりが」の二つの主語がある事になる。明らかに「主語」という概念が日本語と相性が悪いかの証拠である。実は明治期からこの「は」と「が」が並び立って、主語とはならないという問題は、「象は鼻が長い」という例文によって長く議論されてきたものである。「報せは」は主語ではなく、「報せについていえば」…「黒いふちどりがあった」と述べるための題目語を示している。「…は」は、日本語では係助詞と呼ばれ、話のテーマを示す。「ボクはうなぎだ」という文は私＝うなぎであるともとれるが、日常的には「私についていえばうなぎが食べたい」という意味なのである。

以上のように、「いつものように」から「ありました」まで詞＋辞のひと句切りを単位として切れながら、意味上つながっている。西欧語ではS+Pという形式が意味を規定する。これに対して日本語は詞＋辞という形をもつ。辞は明確な意味をもたず、詞をゆるやかにうけとるのは聴き手の判断にかなりまかされている。日本語は、話し手―聴き手の関係から離れては成り立たない言葉なのである。